

令和7年3月6日  
世田谷区立上北沢小学校  
校長 三浦 健仁様

学校関係者評価委員会  
委員長 篠原 陽子  
周防 泰臣 松田 麻美  
松田 洋子 三浦 美里

## 令和6年度 学校関係者評価委員会の報告

上北沢小学校学校関係者評価委員会では、5・6年生児童、全校保護者地域関係者によるアンケート結果及び、教職員自己評価をもとに、本年度も評価をまとめましたのでご報告いたします。

前回よりアンケートの回答もWEBを利用でき、回収率の低下が著しい結果となっていました。学校側の創意工夫により32%から72%へ上がった事をまずありがとうございます。私どもは学校評価を検討するうえで、学校行事や学校公開等に出向き日々の学校生活を通じて学校運営が正しく適切に行われているか確認することはもちろんですが、アンケートの結果の数値から読み取ることも重要視しています。100%により近い回収率で適切な評価をより正しく行えますよう保護者の皆様には積極的に回答していただくようお願いいたします。

さて、本校全体の雰囲気として心身ともに健康で、落ち着いて学校生活をおくれているように見受けられます。ただ不登校、帰国子女も含めて特別に指導が必要な児童の存在も現実です。それ自体は「ほっとる一む」を設置し地域協力者の助けを借りる等で細かく対応していますが、そこが問題なのではなく、コロナ禍を乗り越えた学校教育が新たな展開を迎えていて、個々の児童の社会性を教育する、一人一人に対応したいが関わる時間も人手も十分でないで、更なる工夫を強いられているという現実こそが問題と感じます。

在宅学習を余儀なくされた故のタブレット使用のIT化、働き方改革を推進するための効率化…昨今の教育現場では従来の教育の在り方と未来に目指す教育のあり方との狭間にあり、真摯に向き合えば向き合うほど教職員は疲弊しているように感じます。

IT化の流れ、ITに強くグローバルに対応できる能力を伸ばすことの重要性は言うまでもありませんが、従来の「書いて覚える」「手書きのプリントや文章」の向こう側に見えるモノの大切さ、アナログな対応にこそ児童の心の在り様を見つけられる教育者、一人一人に寄り添う教育が本来小学校教員の目指す姿でありたいのに時代の流れや様々な要因で思うように関われないことへのジレンマを、お話を伺うごとに感じます。

古き良き時代が全てではありませんが、デジタルを活用した学びの転換の中においても人間形成を育み、社会性を学び、さらに言えば日本人らしさを学ぶ大切な大切な6年間です。学校はペーパーテストでは計れない能力「やわらかい心（非認知能力）」の育成も目標としています。学校だけでは到底成り立ちません。学校・保護者・地域すべての人がすべての子どもは宝という意識のもと見守り、ときには手を差し伸べる事でよりきめ細やかな教育ができるこれからであることを希望します。

以上